茶道筌蹄

三

ヲ9
1408
3

門 ヲ多9
1408
巻 3

茶道筌蹄巻之三

目録

眞壺　小道具
香爐
床飾具
書院飾具
釜化者　釜名
同形
釜蓋
ツマミ
環付

執行藏書

釜鐺品目
炭取 小道具
炭品目
炮烙 半田 灰吹子
風炉 土 金 鉄
同化者
同灰 同數板
炉縁
香合
薫物
花入 同數板 小道具

○真壺之部

呂宋（ルスン） むかしハ是非共壺へ茶代貯へしるす文字へよ壺
の紀者也口切の茶の湯成るゝ時ハ呂宋（ルスン）
と上品と次豊太閤の時代共壺をとゝをけ申しかゝる
人世界まゝ不足なる信を左海の網屋助右衛
太閤の命をうけて呂宋（ルスン）へわたり壺五十をとり
求る利休是が品位定め諸侯へわたしをり
蓮花生 呂宋の上品ゆゑ蓮花の上よ王の文字にて
清香 是も呂宋の上品ゆゑ清香の文字にて
頼戸 信樂 千家ゆゑハ此二品 呂宋 頼戸 信樂

○同小道具

口覆　紐　敷緒　乳緒　長緒　去形　取緒

口緒　右何もの事の内へ袋を結せび組し乳緒

長袖と用ゆる等を家すべは陸流高らう始る

口切茶　桐二重茶　小刀　袋紙　板茶一枚ま　封板　桐　箆　竹

壺の口紙切るを初め箆すを筋とへを其不ど小刀すを

切て袋紙の上へ茶と壺より出し〻著すを濃茶乃

袋紙撰出し〻薄茶ハ袋紙より茶漏汁へ移し〻

漏汁　壺へ入を封板すを封し紙を糊を塗るを

壺の口紙張り紙下を押ら

茶茶漏汁　桐すをうし〻と細く次

茶碗へ茶　桐すを濃茶十匁と薄く茶と綿ふ

すは此茶へ入るを

○香炉之部

床飾之具

書院飾之具

金　磁　漆付　陶焼　井戸　三島　楽焼

何もむ〻〻〻〻〻〻〻〻と用る

三具足　唐金　朱焼　東山殿御物中央唐金縄耳の香炉

磁　縄　カワラ　の花生　左磁幅帽子

○京愛好の三具足ハ磁幅帽子を朱〻字〻中央

赤朱の線書を掘ハ書朱金入の花生なり○東山殿

御物の写しも朱焼とはなり

香板　黒塗横長く上は環になり紙縒とする黒板と
三具足の基は板用るなり環無しなり

卓　高貝　唯朱　和物　高歇の香炉は金玉とも床へ置て
置く　板とも無とも　俳し無床なるを置く小さは丸香基を用る
格合置置なるは無し紀内なり

○利休不持は卓様へ長く高麗卓の低き様なる紙
拭なる黒の花塗なり

冠棚　利休は持黒塗長角四方にて柱なり床の結び
無なり

香炉基　アラメ松木溜　原叟好アラメ黒瓦紀黒は香鞍
なり

○茶道筌蹄巻之三

なり　唐物　和物　子を家は持跪趾の麒麟飾線香の時是
線香立　香合と用る香炉も空炷は香合と用る灰押銀
の上は香代置て火と入る

硯箱　利休形は方カケゴなり
上の重は棗柄の小刀　同錐　相封板　白元結二尺　海村不用
下は角瓦の硯　棗焼結文梅の煙柄の水入　香炉第入　棗柄
の筆一対　但一本は帽子付なる
○利休形は一閑は仕なるは元伯好なり
○松木溜塗は原叟好文輪と老松を造る
○文輪は元伯好なり長角なる輪端黒塗玉宝和名の

書きて文恰の二字と金粉まぶる一閑張の長文庫と
うり合せ

文庫　利休形桐ヤロウ蓋の絵うり

月張物（ツキヒラキ）　蓋の裏ハ秋海棠の絵表ハ小菓の絵にうる
利休形裏ハサヽゲ表ハ大菓の絵ハ光伯好うり

山焼　多家に持隅テビシ形蓋の裏ハ山焼の絵うる
人物にうり元来唐物にうり作り色を桐朱地テビシ形
にて絞うり

長一閑張　光伯好文恰ハ添入
○文庫と用いぶるとハ秋原と二折ワナと右と
うり其ほかハ視若と同く

机　利休不持棄今日庵伝来ル

独鈷（唐和）　竹を竹籠好白竹二ツ割脊合せ摺漆

竹籠（ヘラ）　如心秋床飾ハ用也大流の書ハて祖仏共殺と
敗入コンジヤウ入裏渋塗紅緒口ツ手床の二ツ割一ツ分
摺ものの方へ立く魚緒ハ客付

喚鐘（撞木）　紅の緒撞木利休形棄菓口ツ手の緒

面　二尺小面と用也書院ハ向て左の方ハ魚ル撞木色
向て左り朔羅の撥ハ向て右ハ魚ル但し撞魚ると兄色
右の方撞釘二本ヒラキ一すハを釘うり

供茶具　光伯好八一宋張小壺二ツ一宋張の茶盆袋を焼切
茶池唐草撓腰の純子と二ツうり　（帯茶壺ハ茶盆地の方　撓茶盆ハ撓腰の方）

○如仁安好ツボ〳〵壷袋ハフウツウの玉と宗地金襴の
玉ト二ツ用ヒ一閑張ヒ子リ縁の盆よ玉く（濃茶茶宗地の方 薄茶茶宗ハフウツウ）
盆山　葛盆　千家伝持盆石の銘元伯云る然輝七夕を
山中氏伝持。盆石赤松ハ葛盆よ玉石を重元砂大小
ちりゆせバラリと蒔ク（云る然輝ハ山水書名之 七夕ハ山中善作伝持）
○釜作者之部
芦屋　筑前　明惠上人始て釜を命じと云
天猫　小河原河内天猫ハ茶釜沙よ行ひ（河内天猫ハ文字天明之）
関東　天猫の脇作其外江戸作を一同よ関東作と云
天下一西村道仁ハ紹鷗の釜沙ク与二郎の師と云
紹鷗好さ〳〵川と云て釜行り塩物ク道仁の作

与二郎　初休の父ヒ沙ク辻与二郎實久と云弟子ク
泉口郎　後左衛門と云へる行り上手更釜沙ま此人
の作と与二郎と極む法名一且
浄味　先祖と名濃屋越前入道善心と云て東山時代
此後洋ク迄る孫よ玉て大佛の種を蒔る者を初代
浄味と云。此大佛の種始め与二郎へ被作付し一和
縫換〳〵大津の辺へ逐電（ナリテン）し更也入道しを一且と云
其間の作よ雲龍の燈籠行り今妙法院御宮行り
作ク蒔也〳〵今の大佛の種ハ初代浄味の蒔る作
二代浄味　昌叟齋と号
三代浄味　二典と云原雙阿代ク二典浄味ハ世俗よ云

足切淨味是より後八庄兵湯代桃好俱に淨味の弟子なり
初代より今まで（常）此所を用ひ
道弥　道仁の弟子なり　大西弥一郎と云江岑同代
此頃より道運　道有より不詳
道也　道弥の子弥三右湯と云後道治と改む原叟同代
道爺　道也の子弥二右湯と云原叟同代から此同代へ
かく数百陀達广坐八原叟好累坐富士八如仙好なり
寒雑　初代淨味弟子宮崎義九郎と云加州利長公へ
召出御釜師と成る其家今まで此事を紙の事八別録に委し
九兵湯　西村九兵湯と云道弥親類元伝同代なり
淨林　姓名大西淨味の弟子なり

淨清　○淨林の弟子なり足立郡にも織部と云と陸奥へ
以淨林八江戸に居て御釜師と成る淨清名
京へ移りて住す
淨元　淨清の子なり
淨頓　淨元の子なり
淨入　淨頓の子なり
淨元　淨入の子なり此人なり道爺死後千家へ
出入の釜師となる弟なり
淨玄　淨元の子なり幸吸同代
清右湯　淨玄の子なり世襲弟子奥平佐兵湯と朝
淨元　奥平佐兵湯了雪入道と云其子清右湯と大

西姓子河内
佐久湯　奥平氏了雪入道の弟なり
淨西　大西氏
頓入　廣瀬氏
○初の元井上氏　後の元細野氏　佐久湯か大西
○釜の茶碗事
淨味　淨元々モミの墨目よ書く
寒雑　桐の墨目よ書く
道也　モミの横目よ書く
道爺一代々　桐の横目　何きもサン蓋なり
○釜の蓋

干り蓋々　阿弥陀堂　九谷釜
薄干り々　尾張
スクヒ　ヨメウ蓋　紹鴎小霰の類　一文字共蓋石目
○釜のツマミ
花の實　梅の花と二ツ合せ〳〵
遠茄子　山梔子　鑄又キツマミ　俗よ業鑄蓋といふ
鉄推ツマミ　環ツマミ　俗よカキタテツマミとも
○環付
鬼面　瓜敷耳　遠山　アマツラ　雑の事なり　松カサ
茄子　サイ　責紐の事なり
○釜敷々辨

真形　シコロ形なるのたなを鶴首式形といふ芦屋
天猫なる多し其後を山字なりなり古作更好者也
底なる懸返しなるなく細なる輪なり
透木　イロリ透木釜古作ハ好なり原型なるなる乙御
茶なり庸物なり始をアラレ富士釜なり
鶴首　名物の鶴をハ八す利休形、是より小さし鶴
首風呂ハ名物の方を多なるを是なる形が更利休形乃
釜なハ少し大ブリなり利休形鶴をハ石目蓋真
鉄平環なる方ともケキリなり
責級　天猫始て黄人へ秋茶の名対を付るをもく
小霰　紹鷗伝持のうなる是茶なの環付山

梅子ツマミ懸方へシなり
乙御茶　信長公御所持　加州侯御所持。信長公宋
四へ坂なを鶴なる新其時の柱哥なる
新名なる新形なこの姥口と
人なる吸なんるなる地しなるなる
此釜の字しを加州侯御所形義更人を雅の作と者
もべし（作ー環付鬼面なり）天猫なる輪に付きども姥にをなりしこと
百會　利休百會なる開也天猫作姥に霰鬼面の環付
唐金の落モリ蓋南図ハ鞍山侯御伝持なり
鉈（多）　百會なる似なる肩なる張なるを鉈目なる色ナタ釜と云
環付鬼面天猫作利休伝持なり南図加州侯と御所

藏るり雲雅の作といふ

大溝堂　作不知叡山大溝堂の香炉と釜を用ひらる
物なり大溝の文字右より書立たるも左より横ゑ云
事紀もいつり本尊ハ御物なりしぶ明房小焼失し
たりと雲不明廣口共蓋常張緞

唐犬　宗旦伝特天猫作共蓋二味線耳なる雲へ見
立て唐犬釜といふ勢州神戸侯御伝特

針屋　芦屋作針屋宗玄伝特コレキの内雷紋いり
緞ツキ遠山

万字　天猫作雷紋と卍字と交りし代大徳寺紀云
卍字のミいるハ主物云義也沙中尾宗古伝特の写し

野溝　天猫作廣口特朱ゑ猿猴の提振緞付ゑ蓋底
金蓋野溝某伝特雲へ野溝といふ

地蔵堂　遠州釜胴おしよくいル鞍口緞付鬼面底
金蓋ゑ地尾州北義堂の常住釜ゑ天猫作へ
小田原侯の内利休ゑ出し小田原風呂へ（小田原侯中へ持ひ入れ風呂）取
合ひとぞ

東陽坊　天猫作筒釜鬼面鉄の力ケゴ蓋ゑくアゲ底
ケキリ表緞の九環利休所持ゑ表仙堂東陽坊へ送
ゑ〜坂ゑ東陽坊の名いり

蒲団　利休伝特ゑ二郎作鞍口鬼面底金蓋伊豫面
條長御伝義平九といふ

切合 世ゐる切角といふ基子風炉が好うもう其余色こしらう
廣口 古作よ多し道安好こと二郎作すと輪口と
焼口といふ
皆口 天猫よりこしらう好もう
焼口 口作り志女の口よ似せ数也よいつ
十王口 輪口の上乃おし開くをいつ十王の冠乃形よ
似せる也よりなぜく
九釜 利休形と三郎作輪口庚金蓋鬼面環付
尻張 利休形と二郎作一名泥障釜といふ
阿弥陀堂 利休好釜の大の方を有る阿弥陀坊へ好こ
也尻九釜尻張阿弥陀堂の三ツ大中小ありまでも大

と小こ成よりこと寸
○原叟好阿弥陀堂八小の阿弥陀堂又中の阿弥陀堂
口と作りこくみ家伝持の蒲堂釜の蓋と裏用西班
三典浄味作り
國師 春屋國師伝持と二郎作尚同山中氏所持
國師九といふ
日の九 自然と九こ出来也名付くと二郎作三井
元こ助伝持
口方 クリ口鬼面去輪の卒環篭被かく切角ケ大八
妙庵好小八元作好芸蓋推ツマミ尚同こ
大八石目蓋り古作八芸蓋と庚金石目花乃実

鑄ヌキツマミもあり又唐金蓋もあり

萬代屋（モヨヅヤ）　天猫作万代屋宗安伝持霰一紋せばとゝへども

唐口鬼面輪口肩より筋あり黒地のあるとゝ

雲龍　利休形を二郎作地紋雲龍カケゴ蓋ハ共蓋

大ハ切子ツマミ小ハカキ立環付鬼面少庵好也

鬼の環付ハ大ハ小ハ一何也も共孫兵衛仙叟

好ハ小ハ中ハ小ハ一御の方張ハ織部好ハ中ハ龍ハ南蛮

いづれもアゲ底也

龍釜　与二郎作環付統ハ似ハ九釜の如ハ与紀ハ

桐釜　利休形口方釜内肩ガ落ヒハ桐落鬼被ハ

さるもあり大小あり

巴蓋　少庵伝持霰平釜切カケ環付鬼面天猫作蓋ハ

少庵好巴の地紋ハ山中氏不持ハ

土斛　宗旦好ハ出ハ赤ハ好也ハ元朱天猫作底ハ

九ハ清作唐金モリ蓋新山唐御伝義ハ

口方口　元伯好元朱天猫作底ヲダレハ作底鬼面

共蓋元作より探幽ハ作ふ足切浄味字ハ力立

環付ハ子家ハ鬼面と用也

裏（ウラ）鬱（ガワ）金（イリヅ）　裏合　裏奥ハ鬱ハの文字ハ元朱イリナベ字カハ

の鬱の底ハ内ハ作代ハ久しハ元伯好元朱天猫作

黒の環付ハ

黒座　元伯好元朱天猫作の大釜代ハ人の為ハ唐代

切上ゲ中ニ高クリ口ニ鬼面唐金フタ山中氏
所持 但し佐之座門弟陀といふ
立鞍 元来好瓢覃とひつくりかへる様なる元祖
所持天猫作世ニ多しいふ覃瓢釜ニ似タリ
腰石字 原叟好丸釜切象ニ腰ニ卍ノ字ニ好ノ三字
ノ鬼面環付鉄ノ鬼面風呂ニ添ヘ浄味作ニ
同口 原叟好琉球風呂ハ好む浄味作ニ大深清水
長ニ清所持
百代 原叟好板風呂ニ好む釜取ニ口ニ雷紋ノ唐
釜蓋百代文字花押もノ道爺作
巻一広出二 原叟ニ桐院ニ清巌和尚建立ノ巻一広堂ノ香

炉ト釜ニ次第ナデ口方肩ニ玉縁ノ一ツダレ香炉
耳共蓋清嵩和尚ノ書ニて達磨堂ノ文字ノ今
有弘山長ニノ字ハ道爺作数二十
角釜 原叟好ミ丸ブリ肩ニ玉縁ノ刷毛目クリ
口共蓋常張環ヲダレ蓋ニ芋ノ文字ノ戸
大西九ニ清作 芋ノ文字ハ亜筆ニ江戸ノ清岡中ノ好ミ浪茶竹浪庵作ニ外福垣休庵ノ書
累世富士 如心歌好道爺作鬼面相釜ノ累世ニ
環付ノ上筋二ツノ風呂ニ合ス
雷考 如心歌好浄元作唐口唐金蓋鬼面環付如心
歌ノ書ニて雷考ノ二字ノ後ニ玄素ハ好ミ太蔵(トヨシ)
釜実法ノ○啐啄歌風呂ノ同ニ釜代浄元ノ

[illegible]の釜と称する陵の釜を称する釜を燕子花(カキツバタ)と

ダツマ　作者不詳　峰啄敲の芦屋作の雲龍の図

の釜をうつを好むし

刷毛目焼口　うく敲好二代目作　清作　鬼面環

付唐金一文字蓋　山梔子(クチナシ)つまみ

但し　お庵好の巴蓋の通すを刷毛目なり

鉄瓶　うく斎好　寶珠形唐金フタ二代目作　清作

作なり

○釜漆品目

鐶(クサリ)　むし〳〵を唐物と用ひ小堂貴ハ又徒と考る程の次廣狭

を問ふ事なかれ　鐶を用ひる者は環の間と云ふ意問ふ

べきなり

自在　利休居士時代さしル釘へ掛なり多き更約草

の物を遠ざけ利休の判にハ性味しを約字付考れ

ども小サルを何物なるも有なり件乃切口

生なり自在の端を小百ハ九寸より廣間ハ一尺五寸

竹の節ハ又隠ハ尺五寸の天井すを節の数なく又隠

の分ハ節不足かゝるべし小槌ハ桐(トウノキ)材木鏈ハ葉莢(ゲミ)小

槌の付緒上の魚緒ともよ白芋なり

環　平環ハ四方釜　九環ハ雲龍特首東陽坊

但し大小あり　常の張むしろ張　去瑜々去の張し

立徳　茗を基子風呂より切魚ケ去風呂まをも透木弐

用也紹鷗因代より又徳を用也るあらんか徳の形ハ

小瓶　利休形　鴨瓶　サツマヤ形　長瓶　法連

法連ハ下の輪カイより付を上ゲ下ゲ　自中るう和州法連

村まを初を造るが故名付るあり

茶去笠　白　大色　利休形　原叟を造形　白大色　四ホ行

此始り松屋茶記より始を用也る人の名付るなり

約　去瑜の木瓶ハ雲龍頸　東陽坊より用也　鉄乃

九を口方より用也　鉄の鐵の又ハ小九　小尻張　火ブリ

ヲ形釜より用也○子衆此三ホを一名より入を此ハ歌の

書まを利休ハ行ちと行うまを也　茶道流まを此二品を用也

此外より達ア巻より用也去瑜九鍋を序端ア

アがきにあり

透木　利休形ハ原叟形　元伯形ハ桐いづきも炉風呂共

行り山中氏ハ行より元伯　茶付大中小二ホ行るよう

茶を取ヲ　百伝ヲ本松ヲどの張とい

端を　裏茶釜より用也透木より無るもあり

○炭取之形

唐物形　竹組　ト組行り

和物形　外組利休形　有る去産碎啄歌好　森宗

義ト組茶組字今好

茶の絃縁る　利休形　正親町帝へ進献の形なり　枚の本地

瓢　利休形　底付八元伯好

神折炭　一閑張大八元伯好　小さ原雙好

葛桶　一閑張元伯好大さ底ゑ輪なくて浅し　小さ

炭斗　拵利休形なり

炭箸　利休形鐵ゑ柄釜の仕様仕舞ゑ用西壱人作去

さ空炭ゑ用てもよろしく

○同小道具

羽箒　むくさ鶴野原　茶　銃さるで用ひられも

啐啄斧ゑ鶴ゑ張る但し三ツ羽八利休形なり

一ツ羽　利休形茶柄極暑ゑよろしく鶴ゑ左右共

ゑ付なり

ツカミ結　茶筅ゑ用西ツボ羽中ゑ枝なり

火箸　サハリ炭カハリなれさ飾火箸炭取へハ茶柄と

用西サハリさ紹鷗の仕様写し　椎形紹鷗所持ゑ

茶杓平型ゑ付なりとゑ

石鹿子（ナコロギ）　利休仕様鉄の象眼ゑ家ゑ作来仕

弓形　角鹿の形ゑ付なりゑ如仙斧好表裏の

ゑ付ゑ茶ゑ好なりなり

椎形　表裏サハリ写し

桑柄　利休形金の所ゑ袋ゑ付なるもなり

鉄張　利休形風呂に用ゆ

環　鉄大小いろいろ有り利休形今用ゆる所は大の方なり

其餘を其の環なりに古風なり

釜垂　紙を黄濃紙一尺一寸に横七寸五分に折て

用組物　紹鷗伝持の写し本歌は竹浪庵より唐白

のへダテなり江岑の第書付原豊の折紙嘴啄歌の

極也付いろ葛組は紹鷗伝持のト組なり利休形

なりト組は玉緑いろ葛組はなり

○此釜垂を家なり江戸を宋氏、侍人面付を竹

浪庵の伝持と成る稲垣葛なり

用竹　元伯好大休の節の不を用ゆ

用板　利休形第炭とりに用ゆ相の角切なり

○炭の度

胴炭　炉は五寸　風呂を四寸

輪炭　炉は二寸二分　風呂を一寸五分

管炭　胴炭と寸法同し

四方炭　炉は二寸五分　風呂は二寸

○炮烙と新

甕蓋　南蛮のツボ乃蓋なり

島物　倫家　信樂

樂赤焼　利休形なり

用茶碗　利休形風呂に用ゆ

同焼板　如仁斎好長入与茶碗
同ノシカウ形　素焼ヨ押判ヲ
同肉茶　啐啄斎好炉ヨ用ル
金入　了ゝ斎好若ヨ郎作黒ヨ入金入炉ヨ用ル

○灰・炭ヲ

利休形　茶柄二ク口ニシテ広
女庵形　茶柄ベウヲ火色
宗金形　大判形竹皮巻
仙叟形　同ジ大形ヲ
長二郎形　赤楽焼竹皮巻延付焼ヲ

○半同ニ変

泉州堺同村ヨリ焼来ル焼ハ炉ヨ用ル茶釜風呂ニ
仙叟好素焼ヲ小形押形ヲ炉ヨ用ル大
炮烙ヲ丸ハ底取ヨ用ル長二郎作ヲ拵ヘ

○風炉ニ就

古風呂ヲ金風呂ヲ後ヲ金風呂ヲ
五ヲ古ヘ
透木風炉　むかしハ徳忠ヲ珠光ヲ始形
但シ此灰二文字ヲ
紹鷗風炉　表ノ風呂ヲ以紹鷗時代ヲ徳始ヲ
出来ル外ヨ表ノ風呂ヲ以ヲ見ハ透木風呂ヲ
大ヲ上ノ口ヲ火百風呂ヲ同ジ何モ独足

丸釜風炉　大小とも利休形独足し但し灰山ゥ
尾張風炉　大小とも利休形独足し但し灰山ゥ
阿弥陀堂風炉　右同し但し灰山ゥ
四方風呂　大小とも利休形大ハ肩ヲ小さ肩ゥ
独足ヲ付ル但し灰山ゥ
鶴首風炉　利休形芦屋形の名物八寸余の鶴を釜
下ゥ毛好ゥ毛人今の鶴を八風呂結好ゥ大
ブリ肩ゥ肩ゥ独足但し灰山ゥ
道安風炉　道安好何の釜ヲ合せし弘不知子家ヲ
毫大ぞうしゆ唐巴蓋の釜八道安風呂ヲ
合ハヲ独足但し灰山ゥ

雲龍風炉　大小とも利休形乳足但二文字の
達広堂風炉　原叟好達広堂の釜ヲ合ハ鶴を風炉の
ゆくまを乳足但し灰山ゥ
面風呂　大小とも利休形いつまの釜ヲも用ル小の小さ
ゆゑ歌好三ゥとも独足ゆゑ歌好八休堂ヲよし但
灰山ゥ

○灰

見付ケ　見込　切落し　山

真　透木風呂　二文字ゥ
紹鷗ハひとゥ　丸釜　四方　阿弥陀堂　面　道安
とゥし　大風呂八山と二ゥ取形

○風呂作者之覚

善五郎　京良住居二代ヲ堺住居四代より京住し

宗三郎　宗入と〻人ヲ

宗四郎　宗三郎の子ヲ京松原ヨ住し太閤時代ヨ

天下一の名代ヲ新今参江戸住居故ヨ家も江

戸猿楽中ヲ代風呂を開也（御風呂所ヲ）

○但し茶筌細工人ヨ天下一の名ハ

宗四郎

風呂所ヲ

盛阿弥

塗所ヲ

青左衛

楽師二代目

京所ヲ一家の者不詳

善四郎　四代目善ヨ郎の子ヲ初て二代目と京

嘆時代の善ヨ郎とヲ宗善ヲ云ハ二人の外ハ宗入と書ハ

○金風呂

金風呂の始ヲ唐物鬼面乳足ヲ則茶ヲ風呂

ヲ南浦紹明持渡ル崇福寺ヲ大徳寺へ

伝来ハ後恵仁の乳ヲ焼失ハ○ハ風呂の張

付鬼面ヲ押切ヲ

灰を押切ヲ

風呂風のヨトサカ行

風呂風呂

江岑の息女と紀州の某へ嫁ヲ行ハ紀居

間の妻子の風呂ヲ好ヲ唐物の茶罐を急ヲ其

後故ヲ不縁ヲ道ヲ

るまやし風呂のこと千家より伝わり来る茶道を薩摩屋の伝持とする今浄益なる写しを製す風呂の指図を
臺子風呂の風呂釜式入る易き伝なる物なり其後原叟なる
百俵と伴に世に用ひられしより茶道に用ひる毎なる
鉢ひぬ如く新茶書に累世富士と製しを此風呂に用ひ灰
二文字なりしを荷灰なり
琉球風呂　原叟好む風呂なり岡口釜式製一用ひ灰
二文字抽切し
鉄九風呂　七二郎作なる大振なる家伝外利休の形
なり如く新茶書付なり
同道安風呂　千家なる八埠瓦新好を製を但し古

風呂の道安形より小フリ
同鬼面風呂　古き形なるを八原叟好香サマ
なり浄味作略し釜を腰万字灰カキ上げなり
板風呂　利休小田原陣中を好むといひ伝ふまども
千家なる八元伯古新人好者なるが始なり板木地塗上げ
五徳なり透木原叟八百俵を合に初めを用ひし
釜を不新
○風呂敷板
大板　一尺四寸四方臺子の板巾を四角なせ寸法
表塗八紹鷗好なり南河利休を製なる八相のカキ
合せアラメなり横へ長なる八長板を半切なるし

アラメ巻好不知一閑ゟ字〻と書ク

小板　アラメ大小板赤地花塗利休形　松赤地大小ゟ

峠塚新好漏ヌリウルシ

尤板　大板と尤く仕ゟ物ゟ表面にウ表塗絵赤地

紹鷗好蔦琳風呂蓋子風呂唐金風呂ゟ

○面ゟ〻ケヤキ赤地カキ合せハ鉄鬼面風炉ゟ

限ゟ多ク

瓦板　織新焼大徳ちす松庵園中ゟ始久百氏織新

焼の瓦ゟ花壇と造ゟ物ゟ瓦板ゟ中古鉄の尤

釜風呂ゟ表くゟ二郎作の大阿弥陀堂ゟ五合ゟ風

呂の名称ゟ用ゆ形ゟ始ウウ古風呂ゟ用ひゟ

かゟ形赤焼ハ如ク好長入始ゟ製ク茶一方金入唐子

鉄風呂ゟはゟ〻ゟ〻ゟ古風呂唐金ゟ用ゆ

○大板ハ縦ゟ横ゟ九ッ七ッの内尤合

○小板の大ゟ九ッ七ッの内尤合

○尤板ハ五ッ

○小板の小ハ九ッ十一の内尤合

○瓦板ハ小板ゟ同

○炉縁ゟ新

炉の寸法むゟ一尺五寸六寸ゟ

紹鷗ゟ一尺四寸ゟ宗ム利休ゟ寸法

と開ゆ形ゟ六尺三寸ゟ

分ヲ用ル　七寸ヲ二ツニシテ一尺四寸ノ板ニ用ル
七寸ヲ六ツニシテ合ヲ六尺三寸ノ長サニ

真塗　利休形桂木地四畳半ヲ用ル

木地　利休形沢栗ヲ面時ハダツヲ用ル基目向切
時ヨリ四畳半ヲ用ヒテモ可ル

接合　むり陀人ハ木地ヲ接合セテ塗用ヒル形モ原
豊ノ西陽氏ヲ初メ利休ヨリ形ノ相ヲ写ル木地
沢栗ヲ四畳半基目ニ限ル　但シ西陽氏トハ張花紋屋
若太郎ヲ云ヒ氏庵ヲ初メ

九太　利休妙喜庵隅炉ヲ好ム故ノ九ヲ面ヲ皮ヲ
残シ六分ヲ一尺三寸四分炉壇八七分ヲ組
此寸法ヲ限ル

松木　啐啄軒好溜スリウルシいつきの圓炉裏ヲ

用ル

利休堂　仙豊好ノ木地アラメ基接合セ先指ヲ限ル
利休堂ハ二畳中板ノ基目ヲ元形ヨリ広ケレ
庵ハ今ノ如ク

高臺寺　好ノ太閤御用ヲ云ル基寺ニ付ル
浪花ノ板屋ノ作木ハ今津田氏所持地基塗ヲ
蒔絵ル　板屋ヲハ長堀板屋ヲ清
津田氏ヲハ道頓堀久左衛門

○香合ヲ新

香合ハ道ヲ中ヲ玉ヲ指ル相ヲ利休百合
ヲ香合ノ書付ヲ支仮名相ヲ仮名相ヲ
堆朱書ヲ限ル　○張成ノ揚成　○周明

此二人を宋朝の堆朱の三花とす

張源　錆斑　呂甫　金甫　王国

王墳　印堆　此七人を元明の頃の人時代

定めがたし茶の三人と合せて堆朱の十花とす

存星　影を星の中に物行る物を存星とす又存清と

書て人の名とす一説も行る時代不分明なり

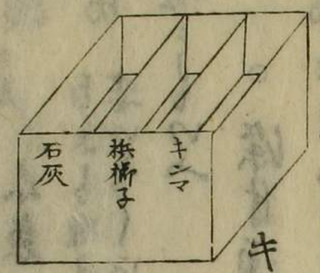
但し東山殿飾書に書るを存清とす

堆黒　唐物にて新古に十花の内もあり

緑紫紅花　狸猫文字の通りにて十花の内もあり

菊蕊　安南国にてキンマと入て蕊のキンマの蕊

檳榔子と色と石灰と貯て食後に用るよし此花とカゴ



花と二通りあり此蕊に似たるものをキンマとす

キンマとは檳榔の葉なり

安南辺にて人歯を黒くする日本の鉄を盆

に出しごとくキンマの蕊に檳榔子を色

此通りの蕊花に入て出す也

コマ　言葉にて子るくん柏木とは非也

言葉　唐物と琉球と二品にあり

象牙　唐物山中氏に紹鷗所持宝塔形にあり

○言葉類

雲鶴　玉にて古し

角牛　玉にて作る物なり名とは雲州産産産山中氏に

いろ角すゝを蓋の上より牛の深すり毛いろいろを白花地
まを白呉洲すゝんゝ
桔梗 七皮　朱瓦 七皮　一紫 七皮　朱紫瓦 七皮
元和慶長の比七皮といへる唐人の持渡るを七七皮といふ
蜜柑 七皮
犬張子 一種の地桃の上より犬と雀と向ひいるを比地なり
開扇 七皮　朱魚 七皮　桃子 七皮　角 七皮　九 七皮
裏白 白糸を張りを間色 安いろ〳〵いろ　七皮といふ時代新しき糸を
張るもいふ
○深付類　古深付　出嶋　新渡
扇風名　甲より カゲヒナタの桔梗瓦いろ茶ほよいるぶ

糸と跡ろ二辺といろ横芒の張る地
張子牛　角甲より外牛の深付横より業平菱の桔梗桔梗
いろ牛の向さより左右いろ
荘子　角隅より深紋まを惣ろいろ横織地りまう
小牛　糸入角水中ろう牛半分出るる上より月いろ
紫牛　糸入角抗より牛紫をいろ
元龍　糸入角元龍のまうを
引捨牛　いろ牛まを惣長く引捨る
拆牛　甲も横も織りまいろ稀より上より文字いろ
亀　亀の形まを既おし延をいろ 浪花布屋 加茂清左衛
桔梗　桔梗形脊ろし横より望をまどいろ 桜屋深者ろ

以持ち

兜巾菱　四方菱をもとみゥカゲヒナタ模様

塔屋喜多流以持ち

松川菱

結文　大小ひら小と玉章と以横織紋上に山水模の

上に碁おひら小を一ツ宗ちて結びめ一ツ家形

大の方隅流の書付ひら

鞠夾　〇　織紋ちゃうヤラウ蓋

辻堂　角四方鳳凰根の上に松葉と木の紫のもち

ひら下に角ち

菱牛　菱形深模様の外牛ひら大畑牛ともに模織

紋ちゃうひら

菱一ツ　菱形甲に立ひら右下に卅ひら模葉菱

の中ちゃう模様ひら

刺ゝ一ツ　柱木に刺ゝ一ツの模様ひら

横牛　六角甲に外牛と散横模に寶尽しひら。是ハ

横に横ぢ横ちゃんう牛放桃林野のことちゃんな

橋桔　〇竹の中ちゃうひら織紋もひら

分銅　深紋ひらと甲に少さ分銅ひら

梔子　甲に梔子の花の模ちゃる深紋ひら模に織り中ち

埣螺　横螺　二丈龍　丁子　梔　扇

祥瑞　地名ちゃう唐青チヤビヅエンの移治　五郎太南八郎塚清四人ちゃう

明末の祥瑞へ渡り焼物とする事歴然明末
五良太甫 吳祥瑞造 ゴ〻〻の文字にて五良太甫焼
なり文字なる紀は只焼なり書物に代る迄
一説に吳祥瑞といふ人の名なりと五良太
甫は焼物と脇盆を入る者といふ説にて
○但し此郎を更と書しにて〻〻五良を甫
と云べし日本へ渡明後明人の五良太甫に
送る詩にて 式待伊勢松坂 某の家に義に
霰雪 花の内に多〻〻と有るとの絵にて其外
織紋り 織紋り
壁瓶 織紋り上に蒔絵にて
織紋り編子紋菓にて 第二段ヤロウ盆なり

樸瓶 壁瓶同様の拵にて壁にウ子リにウ子リ乃
なれと道具屋にて桃と云
蜜柑 織紋り上に蒔絵にて
瑠璃雀 悪瑠璃にて羽根少し出くロの穴通る
鶴 〻〻紀鶴の形羽根の間に詩にて
茄子 赤ナビ
橘桶 漆付の橘桶同様にてヨウ入上にツマミ有る紀も
にて編に形織拵にて書分ケ
塊(カブト) 下九く薄平〻〻蓋塊の形に似〻〻遠州輪違
二ツ重但し浪花堺屋庄次郎に持なり 号法華
瑠璃扇 扇の地紙骨にて地文の上に間なりと知る

柏木海波のり毋りけり

○吳洲 地名なるべし

松川菱 二階菱なる甲なる人柏模なる漁樵古右竹なり

周茂叔 菱入角探干につく人柏けり水なチヨホ〳〵と

〳〵なる柏けり遠なる乃ん之〳〵〳〵

朱瓜 松川菱の程程の通りなる朱瓜なり

菱盤 菱の形なる上なる盤のり毋り外ハ広〳〵

有る筆 小角茅後なる漁樵古右竹上なるなる小さ人盤

狼唐 朱瓜程の大サなる狼唐の形なり毋り竹

○赤絃

古赤絃といへハ色を古九〳〵を上なるツてなる

横なる筋なる海波のり毋りけり菊菱なる菱の程程けり其狼唐

一定なる

○吳洲赤絃

定なるけり毋りを菱入角牡丹と花との程程けり

菱菊黄花なるハ落黄なり横寶玉〳〵大中

小けり花もけり

○紅毛物 定なる柏なるハなり

○跤趾 安南と同國なる交趾ハ

古名〳〵今ハ新の名称

角牛 菱入角の熱菊黄甲黄なる牛おく浮上なる三

井山中 南家なる持なり

布袋 衣黒花色形九〳〵を作る面と後と人紀色

猩　猩の形すを後を抱く紫茨萌茨の波分尾しぶ
茨なる布なり
廉　紫角八萌茨赤茨茶もなり
大物子　赤しどを茨と白檀となり赤柘萌茨尾乃
方茨茶なるもなり大判の形柱なり
小遊び物子　大物子なり小なり白檀茨萌茨紫波
分ケなり
大亀　甲は亀甲なり紫萌茨黄黄波分ケ形本地敷の
亀と物なり
錢亀　甲白檀身萌黄と茨と赤柘を形をたりく
足返ると茨赤となり

笠牛　牛の上は笠なり牛茨すを笠萌茨又赤茨茨
笠もなるもなり
二丈龍　小判形の内は升降の龍なり白檀と萌黄と
赤柘又蓋茨なるもなり
茶鱗　外萌黄鱗模すを深もなり
柘榴　丸すを甲は蔕の柘なる柘なる筋二すどなりを
其内は麒麟の柘なる柘風風の毋なる柘なりを金茨
なるといふ金花なるは茨蔕なり筋をへキリの内紫地
茨茨花茨又茨クモの筋地茨茨花茨
烏帽子なる　鴨の形乃柘すを大ブリ形エボしは似なり萌
茨桐根白檀なり

霊芝(イシ)　霊芝とつゝ入て居るもの　呉芝白檀芽

黄芩　芽ありるもの　桐根白檀

青竹(イシコ)

大小鴨　熱萌芽白檀と芽と交ぜもの

長角　煮入上の梅こもの　熱萌芽へキリの内紫

檀よりの芽もの

福禄壽　何も九く此文字の熱萌芽文字の所

芽よりの芽もの上品なり

○白芍麓　所定ぶ

○和物類

瀬戸　利休居の者のノレカウ字一の　所生瀬戸

本寄を京新家原清義居持

芽瀬戸根太　利休居持一翁宗也作朱今雲州産

の焼併平九兵の押形の芽の掛花なるもの

○志野　所定ぶ

○織部　同

○伊賀　同

○信楽　同

○楽焼之新

伯義主　光悦を造を原曳左入と徐写を若出身を

蛤　宗入主好全溜より小芽

焉　宗全を造り宗統書付写一の

舟引　赤　如仁秋好左入作
朱魚　赤　如仁秋好左入作
總　赤　如仁秋好望總ゟ
地紙箱　元絵好赤ゟを甲ゟ薄の穂の敷様作り
鯉　如仁秋好ゟ遊びの金魚の作りを脊中先ゟ明を蓋ゟ
伯樂　如仁秋好ゟこハしと赤と南蛮作り江岑好の通
ゟ代蓋身横ゟ分ゟ

○ゟ造ゟ事

ゟ造ゟ光悦ゟ始る光悦茶ゟノこカウ茶
と自ゟ茶と南蛮作りゟ家ゟを八江岑ゟ
始る武蔵宗具ともいへ

○時代蒔絵ゟ事

聖武時代　奈良の都ゟ
保元時代　崇徳院御時代ゟ
鎌倉時代　頼朝ゟ時代ゟ
鎌倉尼ゟの手二ゟ若しいへ地作り丸紙大二ゟ小二ゟ長角
二ゟ角二ゟ続の巣大二ゟ小二ゟ合ゟ十二品ゟ南蛮世上
ゟ作ゟ吹毛槌ゟ色塩ゟ茶の蒔絵ゟ十二ゟ若の間八十七ゟ
名物ゟ云○吹毛槌ハ浪花桜屋孫ゟ傳作ゟ茶合ゟ近江屋
久ゟ傳作ゟ塩ゟ茶ハ作法屋久右衛門所持ゟ代若乃
カケゴゟ礼若ゟいへ始ゟ
東山時代ゟ　義政ゟ時代ゟ

信長時代　太閤時代

聖武時代より太閤時代までは皆〻蒔絵物なり

白粉解　元来婦人の道具と仮用也

紹鷗新白粉解　黒塗胴合せの家作朱文郎作江岑の書付にて当時白山氏に伝わる　白山氏は慶長安達家

利休新白粉解　利休好盛阿弥作黒塗金粉にて鍬梅鉢の大小七ツ付く

道安新白粉解　黒塗アゲ底盛阿弥の作の家に而作く天然の字〻数百ツ

少庵新白粉解　黒に金粉にてカゲの字甲に二ツ合口と底に数七ツ付く盛阿弥作なり

白ボシ梅白粉解　紹鷗時代より黒塗不知と以ども利休判にて山中氏に伝わる家なり書付出来なり

掛羅　江岑好裏金ナシ地外黒金粉にて梅月の模様

柏楽　江岑好内黒外溜江岑書付に利休後とにて浪花住屋三郎に持なり

三日月　黒漆元伯好胴合せ

檜　東福門院御好内黒外溜又内黒外金溜なり

根来　信長時代までの品なり其後新製ハ少

猿倉　頼朝時代より後に京良にて写〻出来と大仏芳とい山所にて似寄の物製作

○一閑張物

覺巾　元伯好み宗伯朱箱岡山中善次郎伝授
長後崎啄斎写し二種
烏帽子箱　元伯好本哥八条殿所持
所持
梅絣　原叟好本哥八竹浪庵所持竹浪庵ハ稲垣休叟の事
ヲキ上り　原叟好外濃内黒久田宗也病気入全快の祝ヨ
原叟好きれ〻ヲキ上るとて歯岡山中善伝伝持
桃　元伯好内外黒雅楽中大徳寺中覆光院の什物
仙叟書付ハ大ブリ〻但内朱甲ヨ花と葉と金粉
ヨをつる者元祖一閑伝ヨ好ミを不知卒爾故の書付
ハるを廣岡五郎所持　廣岡ハ加島屋ヨ

二ノ月　小の方内朱外黒胴合元伯好本哥八今日庵ヨ
中形サし蓋内外黒八宗全好千家伝持大形内朱外黒
胴合八原叟好五十〻内サし蓋ヨり又宗全好の通ヨ
為代書〻る者啄斎江戸ヨ産武義郎とて
結文　洲濱　瓢覃　梅絣　葛
行ヨも内朱外黒原叟好一品数十ヅ其五品合て五十
ヨ以上支度ス十の内と云
掛羅　原叟好といへども不分明
○未地拵〻新
紀〻参　妙法庵の松乃朱と仮〻製仮左迫仮原叟好乃
老松の割蓋と同ヨ
原叟書付数二十七文別ヨ

宋末元始写一十三行合せ八十五字元始天尊
世頭金服行り甚しはしるり
亀　交趾の大亀の写しるり松に鶴好木地松の木天
然を付るを数ゆとりく
物る　千家所持唐物と元来一年ゆうしたし事
此一年を天然の若葉るり
桐　こく鶴好丸桐とく松の木地大内宗全婚姻の写とぞ
ブリく　原叟好一焼宗家好也
玉　原叟好ぬく鶴人好く也
竹　如心斎好根節をく造る引地る
○一閑こ事

一閑の元祖と朝雪辯金剛山人とく唐人る
宗旦同代後ゆ並屋宗右ゑ門と云者原叟同代し
弟くく孫くく天然の若葉元来一年ゆ続今の
一宗様と冥を元来氏と名乗る唐人一宗ゆう
元来氏とを乗る中ぞ五代よるく

○蒸物之部

重香（カサネガウ）　伽羅（キヤラ）と用るゆうも古し　仁明帝第七皇子
八條宮本庸親王香癖（キ）ゆうを思方侍従の二方と製し
親王ゆ兼和　手中の人々　炉ゆ用也る色利休ゆう始る
白檀　風呂ゆ限るるり
漬干（ツケホシ）　以茶八名跡又ゆ風呂のかをゆ用ひられど今八不用

伽羅　切板の寸法二分四方を二炷（タキ）ずつ茶筅の形に四切宛切入る事

ゆう。名物の香合又は拝殿の香合は炉風呂もよ

伽羅と用ゆるなり

○傳に曰白檀は仲　沈香は紀　伽羅は真　伽羅と用ゆは

香合拝殿の品又は名物の品を紀品に用ゆ炉風呂も

初座拝殿の香合なれば後座には外香合に替へ用

ゆるがよし　名物なれば初後座とも用ゆ組炷（タキ）板は

ほうそう炷が生死行ならひなべし

○花入之部　唐物金類

フロリ　細口輪香壺

桃底　細口輪香壺ゆう

薄端　廣口と云

把綿（タバコ）　把綿の形ゆう

角朱　角のリウゴ

野焼瓶　細張焼瓶の形

柑子（カウジ）口　口造り柑子の形よりあれ

経筒（伊二郎ものこれと云）　往古経巻を入れし筒ゆう

砂張舟　殊光一名特と貨快舟と云殊波形と松本舟と

いづれも二種宗人砂張舟と用ゆる所ゆう

○殊波は殊光の弟子ゆう此器奈良古川源三郎作

ゆう（松屋のゆう）

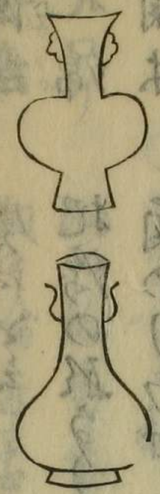
西瓜金　西瓜の金式の金式いづれ

モウル金　宣徳時代莫耶爾國の製
宣徳金　明の宣徳時代より製する所なり

○きつ瓶類

碪（キヌタ）　碪の杵の形似たるもの此の器物通じて碪ともいふ
天龍寺　天龍寺什物の香炉のもといふ
七官　人の名なり前より出る
中花（カブラ）　逆花（サカカブラ）　花なり

中花



逆花

花瓶

同

桔梗口　桔梗の花乃形なるもの
竹の子　竹の子乃形
耳付多の形　耳付多の形
統耳　耳付統の形
サヽゲ蔓　蔓よ筋行く
経筒　経巻を入れ一筒の形　金の形
牡丹　一種の牡丹七官より上手なり
ヒシホ　ヒシホ多なり
花瓶　花瓶の茎形なるよう作る
天目寵　茶碗の天目のもの
縄瓶　井戸　粉炭　此二種かあるべし徳利の形なり

○刷毛目　○二島　○宋胡録（スレコロク）　○南蛮
○朝鮮　○盃物　○波付類　○筒類
○和物花入之類
○漆戸　○黄漆戸（利休所持之故なり）　○浪紙
○唐津　○志野　○丹波　○備前
○伊賀　○井戸
○竹類　并　瓢　筒

一重　尺八　太閤小田陣の砌利休居士供奉して其陣中より夏日久し　或時（アルトキ）蒜山（作者の国）陣内より大竹切る る式竹を夫文を切る其守将北條美濃守氏規（ノリ）を切て花入二筒と製る其一筒を尺八と名付る利

太閤之秘し一筒を一重切風（一書に園とも）城寺と称し之を
少庵へ與へ其後休の花入の始なり風炉もある歟時
雲州侯所所蔵なり

二重切　利休二重切より上り巷の蒔絵を製し
正親町帝へ進献し
綸旨し二重　利休所なり

三重切　原叟上田氏より始て製し山景地雪月
花と書付なり元来八生ヶ濱より切り（南村浪元 後宗旦なり）
置筒　庸軒始なり千家より八原叟始て製し久保
と号し西田氏所持（浪元平作）之家所持之書水の蒔絵
長緒なり如此号と二十本製し但し原叟八

銀の蒔絵天然自然の苔絵あり

酢筒　篭筒　尺八をサカ竹酢筒をスグ竹酒肴

樽もと尺八と云如斯樽を酢筒と制ス篭筒の通

まで節間あり篭筒を節あり

此不酢筒ハ節を篭筒ハ迄

置尺八　如斯南蛮竹完全ものを家所持孤伏犠

舟　元絵嵩嵩まで筏の流れと乃て始を好む

九太舟　元伯好蓋後節限りを切るあり原型舟に

左右より耳を出ス

太敷舟　仙叟好根の節合のせを元示まで切る床の次

指り掛る

稲塚　如斯竹の根節まで作る本寸竹浪庵所持ス

瓢　掛を利休玉ハ元絵　忘切　仙叟好　唐人抜と

後如斯写ス数の物あり

籠竹組　置ハ仙叟好是ハトの手代付ある宗全好

是と泄竹のよすーさるハ是を斯無籠ハ宗全好之

ト組　探籠ハ宗全好トの手代泄竹より暫ハ啄木

竹組よトのを付ある宗全好あり

篠組置籠　宗全好あり

○金類　写ー物

○楽焼之分

モミ烏帽子　赤無花入好之是

舟　黄葉南蛮おしゝ上る宗全好こゝ外字抱ける
　　○同数板こゝ事
矢筈　利休形木地拵黒漆塗
蛤端　利休形桐溜塗蝶脚好ハ松木溜
花香臺　利休形桐の接合蝶脚好ハ松木溜
葉花臺　利休形長角足よすゝけうゝ家ゝ伝持
　　此ゝ歌稲塚の開ゝの時用ゆるよゝ
　　○切溜
枕曲物　利休形内ゝ井の字乃花賦（クバリ）けう足刺（ケヅリ）
　　木十文字
竹　原叟好足ケヅリ木の十文字

楽焼　薄端金入タンハンノ葉原叟好
花臺　枕足歩利休形　薮組宗全好
水次　唐金大巻利休形　小ハ原叟好
小刀　葉柄利休形
繰
蕎撥（スイバチ）　東山殿御好黒塗石巻の金拍座上下ゝけう
　　茶入の大小ゝ袋ゝ折打上ゲ下ケ揚ゝ用ゆる左床張付
　　ゆれバ足ゝ用ゆる事

茶道筌蹄巻之二終

高石蔵書